

# アマチュア・オーケストラの社会学

今 井 治 人

## Sociology of Amateur Orchestras

Haruto IMAI

### 論文要旨

現在、アマチュア・オーケストラの活発な活動が、大変な勢いを見せている。同好会のような小さなグループから、団員100名を超える大きなオーケストラまで、規模はさまざまである。しかし、それぞれの運営状況を見ると、多くの問題を抱えている様子がわかってくる。例えば、運営資金の不足、練習会場の不足などが考えられるが、ほかにもたくさん問題がある。これらの問題と向き合いながらオーケストラの活動を続けていくことは、アマチュアの音楽家にとって大変な労力を必要としている。そこで、問題の解決方法を探るために、アマチュア・オーケストラを社会的な存在として捉えてみたい。オーケストラの社会性を探っていくと、問題の解決方法が浮かび上がってくる。

今回は、地域文化、地域社会の振興と、地域に根ざした活動をするアマチュア・オーケストラとの関係を論の中心とする。その際、キーワードとして、「生涯学習」「メセナ活動」「NPO 活動」の三つを取り上げ、音楽愛好家の集まりであるアマチュア・オーケストラが、社会の中で存在し、社会的活動を行っていくことの意義について明らかにする。

## 序 章

アマチュア・オーケストラは、アマチュア音楽愛好家の集まりというだけではない。アマチュア・オーケストラは、社会に対して大切な役割を果たすことができる。プロフェッショナルなオーケストラだけが、文化・芸術活動を支えているわけではない。アマチュア音楽家が積極的に文化・芸術活動に参加していくことにより、文化・芸術の未来は創造されていく。

作曲家であり指揮者でもあった、故、芥川也寸志は、日本各地でプロフェッショナルなオーケストラのみならず、アマチュアのオーケストラの育成にも情熱を注いでいた。その芥川は、生前アマチュアの音楽についてこのように語っていた。<sup>1</sup>

「愛する、愛してやまぬ、これこそアマチュアの心。」

「ただひたすら愛することのできる人たち、それが素晴らしいはずない。」

そして、「アマチュアこそ、音楽の王道である。」

芥川のこの言葉は、音楽と向き合うことに喜びを感じているすべての人に語りかけてくる。そして音楽家の多くは、「アマチュアこそ音楽の王道である」ことの意味を伝えるべく、演奏活動や教育活動、あるいは社会活動に携わっていく。

### 生涯学習、青少年教育とアマチュア・オーケストラ

音楽活動と連携した教育活動には、青少年育成を目標に掲げた活動が多い。なかでも各地に広がりを見せているジュニア・オーケストラの活動は、青少年育成を目指した活動の例として最もわかりやすい活動である。私自身、以前ジュニア・オーケストラの活動に協力し、演奏に参加していた。特に強く印象に残っている団体は、1972年に創立された「ジュニア・フィルハーモニックオーケストラ」（東京）である。そこで繰り広げられていた熱気にあふれた活動については、今でも鮮明に覚えている。取り上げる楽曲は、大人顔負けの曲ばかりであった。ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの交響曲は当たり前。ストラビンスキーの「火の鳥」、ガーシュインの「パリのアメリカ人」などの近・現代の曲にも積極的にチャレンジをしていた。指導者にも恵まれていたこのオーケストラの合奏の時間は、手伝いに来ている音楽大学の学生や、駆け出しの演奏家にとっても有益なレッスンとなっていた。

私は、このオーケストラが行ったアメリカ演奏旅行にも同行させていただいた。ニューヨークのカーネギー・ホールでの演奏会や、ボストン交響楽団の主催するタングルウッド音楽祭への出演など、大変貴重な経験をすることができた。しかし、私がこのオーケストラについて記憶している素晴らしいことは、普段行われている日常の活動の中にあった。それは、年長者の団員と年の小さな団員との自然な関係である。年長者は、小さい子どもたちの面倒をよく見ていた。練習の時間はもとより演奏会の時にも見られた、団員相互の協力と規律ある行動が印象に残っている。そして、団員の立派な行動は、オーケストラの活動を成功に導くための原動力となっていた。ジュニア・オーケストラもあえて言えば小さな社会である。この社会の中で活動することで、子どもたちの社会性は育まれていったことだろう。

このように、青少年を対象としたジュニア・オーケストラの活動は、音楽を教えると同時に青少年の社会性の育成にも目が向けられている。子どもたちは、まずオーケストラの中での自分の役割を考えることを学んでいくとともに、自分たちの周りにある社会との関係についても考えていく。例えば、団員自ら地元商店街へ演奏会の広報活動を行うなどすれば、地域社会との関係について考えるひとつのきっかけとな

1 新交響楽団第113回演奏会パンフレット「新響と30年 芥川也寸志」 1986年11月

る。このような地域社会とのふれあいは、青少年にとって大切な体験となる。青少年のなかには、生涯、音楽を生活の一部としていく者もいることだろう。そのとき地域社会とのつながりについて考えることは、避けて通ることができない。青少年がオーケストラの活動のなかで地域社会や地域文化に興味を抱くようになることは、地域の将来の発展のための大きな力となる。

音楽的能力の向上を目指した教育と社会性の育成とが伴った教育活動は、青少年に対するにとどまらない。その先には、積極的な自主性を伴った成人教育（生涯学習）へと広がっていく可能性が秘められている。文化・芸術は、すべての人にとって心豊かな生活を営むために必要なものである。それゆえ、成人が文化・芸術の分野を学習の対象とすることは、とても自然なことである。アマチュア・オーケストラは、文化・芸術活動に参加する機会を人々に提供している。音楽を愛し、学んでいる人々にとってオーケストラに参加することは、単なる「学習」を越えた、音楽の鑑賞者から表現者へと移っていく道筋となる。

### メセナ活動、NPO 活動とアマチュア・オーケストラ

「中央から地方へ」の社会の流れに乗り、文化・芸術の地方分権化が進んでいる。地域社会へ浸透していく文化・芸術の流れは、人々の芸術への積極的な参加を呼び起こしている。この現象は、地域社会、地域文化の活性化へとつながりを見せていく。本論で取り上げる企業・行政によるメセナ（芸術文化支援）活動は、近年特に地域文化の活性化を目標に掲げ、大きな成果を挙げている。また、NPO（民間非営利組織）による活動も、地域振興、教育活動において大きな役割を果たしている。このような社会環境のなかで、アマチュア・オーケストラの存在は、文化・芸術を仲立ちとして、市民、企業、NPO などが出会う場としての意味を持つようになってきている。

このことから、アマチュア・オーケストラとさまざまな地域社会との関係は、これからますます重要になってくる。しかし一方で、アマチュア・オーケストラ自身にも取り組むべき課題が山積している。なぜなら、その存在が社会的意味合いを強めるにしたがい、内部に抱える問題も多岐にわたってきているからである。問題の多くは、オーケストラの運営に関する問題を中心としている。例えば、活動資金の問題、練習環境の整備、生活スタイルの変化に伴う団員のニーズの多様化、演奏会の形式についてのさまざまな要望などが挙げられる。しかし、これらの問題は、アマチュア・オーケストラにとって一番大切な“よりよい演奏をする”という目標を達成するために、ぜひとも解決しなければならない。

そこで必要になるのは、解決方法を探すために、アマチュア・オーケストラと社会との関係について考えることである。私が指揮をしてきたアマチュア・オーケストラの中には、オーケストラの活動と社会との関係の中に、問題の解決方法を捜し求めているオーケストラがある。その中のひとつが、神奈川県川崎市で活動している「宮前フィルハーモニー交響楽団」である。このオーケストラは、1991年にわずか14名の団員で創立され、以来「自分の街にもオーケストラを」の呼びかけのもと、地域に親しまれる活動を目指している。現在の活動は、年2回の定期演奏会、子どものための「おもちゃ箱」コンサートなどに加えて県外にも広がりを見せ、栃木県那須町で平成10、11年に起こった集中豪雨災害の復興のために、現地でチャリティーコンサートも行っている。

オーケストラ活動の拠点となる練習会場については、創立当初から活動に共鳴した川崎市宮前区にある幼稚園から提供を受けることができた。宮前フィルは、その支援に対する感謝の気持ちを込めて、幼稚園の園児とその両親たちに向けたコンサートを開いていた。このコンサートは、地域社会の文化・芸術の一つとして、地域文化に対する重要な貢献にもなっていた。チャリティーコンサートや園児向けコンサートなどの活動は、アマチュア・オーケストラの社会的役割の一端として捉えることができる。また、オーケストラが社会性を認識し、活動を広げていくことは、オーケストラにとっても問題のよりよい解決方法を

見つける足がかりとなる。

本論では、アマチュア・オーケストラが教育活動、メセナ活動、NPO 活動などの基盤として、社会的役割を担っていることを明らかにする。第一章では、アマチュア・オーケストラの現状と、そこから見える問題点を提起する。第二章では、第一章で提起した問題点をオーケストラの団員個人の視点からも捉え、整理する。その上で生涯学習（教育活動）、メセナ活動、NPO 活動などを視野に入れ、問題の解決に向けた糸口を探る。続く第三章では、問題の解決方法として第二章で取り上げた活動とアマチュア・オーケストラとの関係について検証を加える。そして、アマチュア・オーケストラの社会的な存在としての姿を展望する。

## 第一章

アマチュア (amateur) という英語は、ラテン語の “amator” 「愛する人」が語源である。「アマチュア」を辞書で調べると、「職業としてではなしに、趣味や余技として携わる人。好事家。アマ。<sup>2)</sup>」とされている。このように「アマチュア」は、芸術やスポーツなどを趣味として愛好する人のことを表す言葉である。

ちなみに「プロフェッショナル」(professional)を辞書で調べると、「1、専門家。職業的。2、専門家。職業としてそれを行う人。プロ。<sup>3)</sup>」とされている。この「プロフェッショナル」という言葉は、profession に由来している。この英語は、宗教上の公言、宣言、告白を意味している。

音楽を愛し、アマチュア・オーケストラの活動に参加しているアマチュア音楽家の数は、近年特に増えてきている。このことは、アマチュアの音楽活動と積極的に関わってきた私も実感している。人数だけでなく、技術面での向上についても大変目覚ましいものがある。アマチュア・オーケストラの全国組織である、「社団法人日本アマチュア・オーケストラ連盟」(J.A.O)によれば、2005年現在の加盟団体数は147団体となっている。<sup>4)</sup> 地方別に見る団体数は、

北海道・東北 23

中部 35

関東・甲信越 47

近畿・中国・四国 25

九州 沖縄 16

となっている。

しかし、J.A.O に加盟している団体は全体のごくわずかである。アマチュア・オーケストラのためのインターネットサイトである、「フロイデ」に登録している団体数は、745団体に及んでいる。<sup>5)</sup> 内訳を多い県の順に見ると、東京の284団体を筆頭に、神奈川の60、愛知の45、大阪の44、と続いている。このように、東京、大阪、名古屋などの大都市とその近郊地域に多いことがわかる。音楽文化の都市集中の現状は、アマチュア・オーケストラの分布状況からも見て取れる。

### アマチュア・オーケストラの組織基盤

アマチュア・オーケストラの組織基盤は、おおよそ六つの形に分類することができる。

- ・市民の自主管理・運営によるオーケストラ
- ・区や県あるいは市などの行政による公的な支援を受けているオーケストラ
- ・文化振興を目的として企業などが設立した財団法人などの民間の支援を受けているオーケストラ
- ・青少年を対象としたジュニア・オーケストラ
- ・学校、大学のサークル活動によるオーケストラ
- ・企業のサークル活動によるオーケストラ

ただし、学校、企業のサークル活動としてのオーケストラについては、今回の議論の対象から外すことにする。なぜなら、これから取り上げるアマチュア・オーケストラの諸問題は、学校や大学の教育、あるいは企業などの特定の組織基盤から独立した立場で活動しているからこそ起こることだからである。

2 新村出編『広辞苑』第5版、岩波書店、1998年

3 同上

4 <http://www.jao.or.jp/members.html> (2006/01/19にアクセス)

5 <http://www.2s.biglobe.ne.jp/jim/freude> (2006/01/16にアクセス)

さて、今示したそれぞれの組織基盤は、お互いに連携ができる可能性を持っている。では、その連携はどのようなものか、いくつか例を示してみる。

現在日本全国で市町村合併が進められているが、この流れは新しい地域を生み、新しいオーケストラが誕生するきっかけとなる。新しく生まれた地域の行政は、地域の文化振興を政策のひとつとして掲げ、文化振興の象徴としてオーケストラの結成が市民に呼びかけられる。そして誕生したオーケストラは、公的な支援体制がしっかりしているので、安定した活動ができる。しかし、後に行政の財政が悪化したときはどうであろうか。その場合には、オーケストラに対する支援が打ち切りになるケースも考えられる。その事態が起きた場合、活動の存続を願うオーケストラの団員は、行政からの支援から離れ、新しく自主管理・運営の団体として活動していく道を選ぶことになる。そのうえで民間からの支援を求め活動することもあるだろう。

もうひとつ別の連携として考えられるのは、ジュニア・オーケストラを中心としたものである。ジュニア・オーケストラのなかには、行政あるいは民間からの支援を受けている団体がある。オーケストラが活動目標として掲げる「青少年の育成」は、支援する側にとってわかりやすく、受け入れやすい。そのためジュニア・オーケストラは、支援の対象としてふさわしいといえる。

ジュニア・オーケストラで育った青少年は、市民オーケストラへ参加するか、独自にオーケストラを結成するなどして音楽活動を続けていくことだろう。

今示したものの以外に、設立当初から自主管理・運営の形態をとっているオーケストラも、もちろんある。このように、アマチュア・オーケストラは、さまざまな形をとりながら活動している。

### アマチュア・オーケストラの抱える問題点

行政による公的な支援や民間主導の財団法人から支援を受けているアマチュア・オーケストラは、恵まれた環境の中で活動しているといえる。主に活動資金と関係のある問題については、その悩みを軽減されている。

私の指揮したオーケストラにも、行政による公的な支援を受けながら活動している団体がいくつかあった。その中には、練習会場費、演奏会会場費、指導者への謝礼など、多額の経費がかかる項目について、ほぼ全額の支援を受けているオーケストラもある。このような支援は、活動資金の大半をまかなうことになり、団員の自己負担はずいぶん少なく済むことになる。

しかし、このような行政による公的な支援を受けることは、行事、式典への出演などの公的な責任を伴うことにもなる。また自主的な活動が大切なアマチュア・オーケストラにとって、この制度が団員の意欲をそぐ要因とならないとも限らない。あまりに安定した活動基盤が、活動の発展に必要な活力を奪ってしまうことも考えられる。

一方で、自主管理・運営のオーケストラは、活動資金について悩みが尽きない。なぜならこの問題は、日常の活動を維持することに直接結びついているからである。ここでいう日常の活動とは、練習会場の確保、大型楽器の管理や運搬、指導者の確保など、練習環境を整備することをさしている。日常活動の維持は、大変な労力を必要とする。

さて、活動資金の問題が起きる大きな要因としては、やはり団員の減少が挙げられる。都市におけるアマチュア・オーケストラの過剰な集中は、オーケストラの団員の減少を招いている。自分の所属するオーケストラを持たずに、多くのオーケストラに参加しているアマチュア演奏家が増え、団員の定着が進まない。団員が安定して所属しなければ、活動資金の問題は解決されない。そして団員の不定着は、オーケストラの運営体制の弱体化を進めてしまうことになる。

この流れは、オーケストラの運営が、団員の活動に対する要望に応えられなくなる悪循環を引き起こしている。その上オーケストラに対しての団員の要望は、多様になってきている。ここで、団員の要望の例をいくつか挙げてみる。

- ・取り上げる曲や練習の充実などの音楽的内容の向上
- ・練習会場と自宅、あるいは職場との地理的な関係の利便性
- ・結婚やその後の出産など、ライフスタイルの変化に対応した取り組み
- ・地域社会との連携を踏まえた活動

このような団員の要望に応えるべく、オーケストラは、日常の活動の中で試行錯誤を繰り返している。ではどのような活動が行われているか、三つのアマチュア・オーケストラの活動を具体例として紹介していく。

### アマチュア・オーケストラの実際の活動における取り組み

まずはじめに紹介するのは、「けいはんなフィルハーモニー管弦楽団<sup>6</sup>」である。このオーケストラの名前となっている「けいはんな」とは、「関西文化学術研究都市」のことであり、1994年に「都市開き」が行われた際に編成されたオーケストラを母体としている。その後「財団法人関西文化学術研究都市推進機構」の後援によって新たに創立され、現在も「けいはんな交流事業部」の支援を受けて活動をしている。

このオーケストラは、「毎週の練習こそ活動の中心である。」とした理念を持ち活動している。入団時のオリエンテーションでは、「練習に出席すること。団費を払うこと。」の理解と協力を求めている。その結果、毎回の練習は、80～90%の高い出席率で行われ、練習の積み上げにより音楽的水準を高めたいという団員の要望に応えていくことが目指されている。また一方で、地域からの依頼に応じた演奏活動も積極的に行い、地域とのコミュニケーションを大切にしながら活動を展開している。

次に紹介するのは、東京の立川市で活動している「立川管弦楽団<sup>7</sup>」である。このオーケストラは、公的支援を受けずに、自主運営によって活動している。ここで注目したい取り組みは二つある。一つ目は、「託児室」を毎回の練習で用意していることである。これは、結婚、出産などのライフスタイルに変化のあった団員からの要望ではじめられた。託児室は、練習会場とは別の部屋を借り、保育専門学校や短大の保育科の学生に委託している。

二つ目の取り組みは、楽器演奏の初心者を受け入れである。社会人を中心とした市民オーケストラでは、入団を希望する人のほとんどは楽器演奏の経験者である。したがって、オーケストラが初心者を受け入れ、技術指導を初歩から行うためには、ほかの団員の助けが大変重要となる。しかし、この初心者に対する取り組みは、誰もが芸術にふれあい、創造活動に参加できる環境の提供に貢献している。同じことは、託児室を用意して団員の活動を支えている取り組みについても当てはまることである。

最後に紹介するのは、序章でも取り上げた、川崎市で活動している「宮前フィルハーモニー交響楽団」である。私は、このオーケストラと共演するたび、地域との交流をととても大切にしている活動に感銘を受けている。その中でも、子ども向けの「音楽のおもちゃ箱」という演奏会は、地域の人々に大変好評を得ている企画である。「音楽のおもちゃ箱Ⅰ 楽器と友だちになろう」(2003. 8. 10. 宮前市民館大ホール)では、子どもたちに楽器を持参してもらい、オーケストラとの共演を体験できるように工夫した。「ドレミの歌」をリコーダーや、カスタネット、そして歌うことで演奏に参加させる形をとった。

またこのオーケストラは、定期演奏会においても親子で楽しめるようなファミリーコンサートを開催し

6 『サラサーテ vol.9 <秋>』 せきれい社、2005年10月、55項

7 同上。

ている。第18回定期演奏会（2003. 6. 15. 宮前市民館大ホール）では、ドリーブ作曲のバレエ音楽「コッペリア」を取り上げた。このときは、朗読と簡単な舞台装置で物語をたどることができるようにして、作品の理解の助けになるように工夫した。

このオーケストラのほかの活動としては、演奏会へ70歳以上の方を無料招待すること、演奏会当日に聴衆のために保育室を用意することなどがあり、多くの人が来場しやすいように環境づくりをしている。

## ま と め

さて、今まで紹介してきた三つのアマチュア・オーケストラの活動についてまとめながら、オーケストラの抱えている問題点をもう一度整理していく。

「けいはんなフィルハーモニー管弦楽団」は、普段の練習の出席率を上げることにより、音楽活動の充実を図っている。充実した練習時間を持つことは、団員の音楽活動へ参加していく意欲を刺激し、オーケストラの活動を活性化している。

また、「立川管弦楽団」の取り組みは、活動に参加する団員の生活環境の変化に対応したものとなっている。練習会場に託児室を用意することや、初心者を受け入れ音楽活動への道をつくることは、多くの人にオーケストラ活動の機会を与えている。

そして、最後の「宮前フィルハーモニー交響楽団」の活動は、団員の持つ、「地域社会に何か貢献したい」という強い思いから始められた。地域社会とのかかわりについて考えることが、このオーケストラに新しい活力を生み出している。

アマチュア・オーケストラの抱える問題は、団員の不定着、そこから生じる日常の活動の低迷、団員や地域社会のさまざまな要望への対応能力の低下、さらには最も大切な音楽的充実に対する不満など、多岐にわたっている。これらの問題を克服し、オーケストラを少しでも健康な姿にするために、さまざまな試みがなされている。そこからわかることは、オーケストラは、周りの社会と何らかの連携を持つことで活動に広がりができるということである。多様な活動ができれば、オーケストラに必ず活気が戻ってくる。大切なのは、オーケストラの内側から提案された問題と向き合いつつ、外の社会との関係についても考えることである。オーケストラは、社会との関係を深め、社会性を高めていくことにより社会における存在の意味を強くし、活動に広がりをもたられしていく。



## 第 二 章

アマチュア・オーケストラの活動には、いろいろな問題が含まれていた。簡素にまとめると、団員が定着せず、活動に積極的にかかわらないことが、オーケストラ内のさまざまな要望や、活動地域からの要望に添えていく活力を失わせている。この問題について考えていく過程で明らかになってきたことは、アマチュア・オーケストラと地域社会とのコミュニケーションの必要性である。第一章で紹介したオーケストラの活動の例は、地域社会とのコミュニケーションの必要性を実際の活動のなかで示している。

さて次に、アマチュア・オーケストラを構成している団員の角度からオーケストラの問題について探っていく。なぜなら、オーケストラの団員は地域社会の住民であり、団員個人の立場から見たオーケストラの姿の中にも、いろいろな課題が潜んでいるからである。

### 団員の視点からみたアマチュア・オーケストラの問題点

アマチュアの音楽愛好家がオーケストラに参加するときに考慮することは、個人によりさまざまである。ではどのようなことが考慮されるのか、四つの項目に絞って取り上げていく。四つの項目とは、

- ・ 経済的な問題
- ・ 地理的な関係
- ・ 心理的な課題
- ・ 文化的な要素

である。

一つ目の「経済的な問題」とは、オーケストラに参加する際にかかる費用を負担していけるかどうかである。参加するために負担する費用は、団費、楽器の調達やメンテナンスにかかる費用、練習会場までの交通費などがある。団費には、練習会場の使用料、指導者への謝礼など、オーケストラが組織として負担する経費が含まれる。また場合によっては、演奏会のホール使用料が別途徴収されるケースが多い。第一章で紹介した「立川管弦楽団」の取り組みにあった託児室にかかる費用も、必要であれば負担しなければならない。

二つ目の「地理的な関係」とは、参加を希望するオーケストラが自分の生活圏で活動しているかどうかである。団員の住んでいるところと活動場所が遠すぎないか、あるいは、職場と練習会場との距離が離れすぎていないかなどが考慮の対象となる。団員は、生活圏での活動ができれば、オーケストラへの参加状況を良くすることができる。さらに地元地域での活動であれば、地域のコミュニティーとの関係も作っていくことができる。

三つ目の「心理的な課題」とは、オーケストラの活動と自分がオーケストラに求めることとの関係がふさわしいかどうかである。団員は、オーケストラとの関係が良好でないとそのことが心理的な負担となり、活動に対する意欲がそがれていく。オーケストラの音楽的レベルと自分の求めているレベルとのバランスがいいか、運営方針として掲げられている事柄について共感できるか、などが不安材料として心理的な負担になると考えられる。

四つ目の「文化的な要素」とは、オーケストラに参加することが文化的な生活を送るために必要なことであるかどうかである。これは、「心理的な課題」とも関係している。団員は、オーケストラの活動が喜びとなり、心豊かな生活を送っていくために欠かせないものとなれば、オーケストラを文化的な要素として捉えることができる。

ここまで取り上げてきた団員個人が考慮している問題は、アマチュア・オーケストラが組織としての責

任を持ち、少しでも改善していく努力が必要である。問題を改善していくことは、団員を定着させるために必要であり、団員が定着すれば活動にも活気が出てくる。このように、団員個人の問題は、オーケストラ全体の問題となってくる。

団員の「経済的な問題」を少しでも軽くするためには、芸術・文化の振興を目指す民間による財団法人や行政などの公的支援を取り付け、オーケストラの運営にかかる費用の一部に充てることが考えられる。

団員との「地理的な関係」をよくするためには、地域社会と密接な活動を展開し、地域に住むアマチュア音楽家にとって魅力的なオーケストラにする必要がある。

「心理的な課題」についても、団員の要望によく耳を傾け、活動における心理的なストレスの軽減に心がけなければならない。

オーケストラに参加することが、芸術や文化とふれあい、地域社会とのコミュニケーションを築いていくなど、人生を豊かにしていくことにつながると、「文化的な要素」として団員の生活の中で大切な意味を持つことになる。

今まで見てきたように、オーケストラの団員が個人レベルで抱える問題も、オーケストラが組織の問題として捉え、地域社会との関係を意識していくなから解決方法を見つけることが必要である。そして団員は、アマチュア・オーケストラの行う地域文化に貢献する活動に参加することで、オーケストラを社会的存在として強く認識していく。アマチュア・オーケストラの活動をいきいきとさせるためには、組織の視点からと、団員個人の視点からの両方から、オーケストラと地域社会との関係を築かなければならない。では、アマチュア・オーケストラは、社会的存在として何ができるのであろうか。今回は、三つの言葉をキーワードとして選び、地域文化の振興で果たせる役割の可能性について提案していく。三つのキーワードとは、

#### I 生涯学習

#### II メセナ活動

#### III NPO 活動

である。

「生涯学習」は、今進んでいる高齢化社会のなかで、人々の継続的な学びに対する要望が強まるにつれて広まりを見せている。学ぶことは、人生を豊かにし、新しい喜びを見つけることができる。

「メセナ活動」は、芸術文化支援活動のことをいう。この活動は、特に企業が利益だけを求めた経営から、地域社会とともに成長していく企業へと変革するために取り組まれている。企業が地域社会のなかで活動していくには、地域とのコミュニケーションが欠かせなくなっている。

「NPO 活動」は、行政などでは行き届かない生活により密着した活動を目指している。一方で NPO には、世界規模で展開し環境問題と取り組むものもある。NPO は、さまざまな分野に柔軟に対応できる活動として、行政からも社会的機能を期待されている。

まずはじめは、アマチュア・オーケストラが、「生涯学習」の場としてふさわしいのか。次に、メセナ活動（芸術文化支援活動）と地域文化の結節点として機能するのか。最後に、NPO（非営利活動）として地域文化の振興に役立つことができるのか。以上の視点から、社会的役割の可能性について提案していく。

### 地域文化の振興とアマチュア・オーケストラ

中央から地方へという社会全体の流れは、政治機能における地方分権化のみならず、文化に対しても広がりを見せている。「文化の地方分権化」は、いまや社会の大きな傾向となっている。地域文化の振興の

重要性には、1998年に文化庁により発表された「文化振興マスタープラン 文化立国の実現に向けて<sup>8)</sup>」にも示されている。その中では、

「…地域独自の主体的な文化振興は、文化立国の実現に向けて極めて重要である。」

とされ、また、2002年に出された「文化芸術の振興に関する基本的な方向<sup>9)</sup>」によれば、

「地域における多様な文化芸術の興隆は、わが国の文化芸術が発展する源泉となるものである。」としている。どちらの指針も地域文化の振興と、それに伴う文化活動の重要性に言及している。

では、アマチュア・オーケストラは、地域文化の振興に対してどのような活動を通じて貢献していけるのか提案していく。

## キーワードⅠ「生涯学習」

まず、アマチュア・オーケストラは、「生涯学習」の場として地域文化の振興に役立つことができるであろうか。

これは、オーケストラが地域住民の学びの場として活用できるかということである。「現代では、“生涯にわたる継続的、持続的な学び”を実現するための“生涯学習(教育)”という言葉が浸透しつつある。<sup>10)</sup>」アマチュア・オーケストラは、年齢、社会的立場、楽器演奏の経験の年数など、さまざまな人が活動に参加できるように環境を整えている。そして、継続的に音楽を学び、練習を重ね、その成果を表現するための演奏会を開催している。団員は、地理的な関係や、取り上げる曲などの音楽的内容、練習内容の充実などをオーケストラに求めながら活動している。では、生涯学習における学習者の求めているものは何か。それは、いつ、どこで、どのような内容を学ぶことができるかという学習意欲に基づいた要望である。そして、その成果を生かしたいという願いも持っている。このような生涯学習における学習者の願いは、アマチュア・オーケストラの団員が持っているオーケストラに対する要望と照らし合わせてみると、考え方が大変に近いことが明らかになる。年齢、社会的立場などの条件を問わない生涯学習の場としての機能が、アマチュア・オーケストラの活動に備わっていることがわかる。

## キーワードⅡ「メセナ活動」

次に取り上げるのは、「メセナ活動」である。アマチュア・オーケストラが、メセナ活動と地域文化の結節点として地域文化の振興に貢献できるのであろうか。

以前から始まっていたメセナ活動が、地域社会との関係を盛んにしてきている。それには、

「文化芸術を創造し、享受することは、人の生まれながらの権利である。<sup>11)</sup>」

とした「文化芸術基本法」が2001年に施行されたことが、ひとつのきっかけとなった。それにより地域活性化のための手法の一つとして、文化やアートを生かした試みが増してきている。そして、その動きに対応するように、メセナ(芸術文化支援)活動が関心を集め、特に地域文化に対する企業によるメセナ活動への関心が強まっている。

企業の行うメセナ活動は、企業からの寄付により基金を作った財団法人を仲立ちとしたものが多い。芸術文化活動に対して支援をしている財団法人は、その基金をもとに助成活動を行う。財団法人の多くは、自らの目的や基本方針として、文化芸術の啓発、普及、地域文化の振興を目的としている。<sup>12)</sup>また現在の

8 『文化振興マスタープラン 文化立国の実現に向けて』(6)地域と文化 文化庁、1998年、3月

9 『文化芸術の振興に関する基本的な方向』第2章、3、地域における文化芸術の振興、文化庁、2002年、12月

10 渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育学学習者支援へのアドボカシー』 明石書店、2002年、9項

11 文化芸術振興基本法、第1章、第2条、3、2001年12月7日号外、法律第148号

12 『民間財団、公的財団の文化芸術振興策に関する基礎調査』[報告書] 社団法人企業メセナ協議会、2002年、44項

目的と今後重視する方向性についても、多くの財団が、「地域文化の振興」を最重要方針として挙げている。<sup>13</sup>（ここでの財団法人には、民間企業や企業経営者等の設立した民間財団、および地方自治体の設立した公的財団を含んでいる。）このように、芸術文化活動とその支援活動の動きが、地方を視野に入れて行われようとしている。

「メセナの目的は、目に見えないものや測定できないものの価値を評価し、異なるものや文化の多様性を理解し、社会をより深く認識する優れた市民を育てることにある。<sup>14</sup>」ここに示されているメセナの目的を達成するには、芸術活動を通じた活動こそふさわしい。特に音楽芸術は、見えないもの、測れないものの音による表現である。また音楽には、さまざまな文化の多様性が包み込まれ、そのことが表現の豊かさにつながっている。そして、アマチュア・オーケストラは、その音楽活動を通じて社会との関係をふかめていくことができる。このように、アマチュア・オーケストラは、メセナ活動のパートナーとしてふさわしい存在であることがわかる。

### キーワードⅢ「NPO 活動」

地域文化の活性化のためのメセナ活動は、最近では企業と NPO との連携が注目されている。そこで最後に取り上げるのは、NPO（非営利活動）である。アマチュア・オーケストラは、NPO として地域文化の振興に役立つであろうか。

まずここで、NPO（非営利活動）について説明を加えておく。NPO 団体とは、非営利活動を行う民間の団体である。NPO の活動が活発化した背景には、1995年の阪神淡路大震災でのボランティアが広く注目されたことが挙げられる。その後、1998年3月に NPO 法（特定非営利活動促進法）が公布された。それにより、1999年2月に全国初の NPO 法人（特定非営利活動法人）が誕生する。2004年3月末日現在で累計 1万6160法人が、所轄する都道府県より認証を受けている。その中で、アート NPO の活動である「学術、文化、芸術、スポーツの振興を図る活動」の分野で認証されている NPO は、2004年3月末日現在で 5012法人に及んでいる。<sup>15</sup>

さて、アート NPO とは、芸術文化活動を社会的な使命（ミッション）として非営利に行う民間団体のことである。そもそも芸術文化活動は、営利目的で行われているのではなく、芸術を主体として非営利に行われるものである。芸術と NPO との関係は、次の三つに分けられる。<sup>16</sup>

- ・オーケストラ、劇団などの芸術活動を行う団体
- ・劇場、音楽ホール、画廊など
- ・鑑賞団体

このうち、一つ目の「芸術活動を行う団体」のオーケストラにおける例としては、関西フィルハーモニー管弦楽団が、プロフェッショナルなオーケストラの団体である「社団法人日本オーケストラ連盟」に加盟するオーケストラの中で、初の NPO 法人認証を受けた。ちなみに、世界的なオーケストラの例を挙げれば、アメリカのシカゴ交響楽団やサンフランシスコ交響楽団などがある。

芸術活動は非営利活動である。社会が地域文化の振興のために芸術活動を支援することは、芸術の価値を認め、芸術を必要としているからである。アマチュア・オーケストラは、芸術活動を当然であるが非営利に行う芸術団体といえる。アマチュア・オーケストラが、芸術文化の振興、創造、普及などの社会的な

13 同上。

14 (社)企業メセナ協議会編著『いま地域メセナがおもしろい 企業+アート+まちの実践』ダイヤモンド社、2005年13項

15 『企業メセナ協議会研究部会2003年度研究報告』『企業メセナの新たな展開 アート NPO との連携』社団法人企業メセナ協議会研究部会、2004年、53項

16 山内直人『NPO 入門』日本経済新聞社〈日経文庫〉、2003年、85項

活動を使命としていくのであれば、立派なアート NPO として認めることができる。そもそもアマチュア・オーケストラには、地域とのコミュニケーション力が備わっている。このことは、メセナ活動にとって大変魅力的である。このようにメセナ活動と連携するアート NPO として、アマチュア・オーケストラは、地域文化の活性化のために貢献していくことができる。

## ま と め

アマチュア・オーケストラが活動を続けていくには、団員個人が抱える経済的、心理的、文化的なさまざまな問題と取り組まなければならない。これらの問題の解決方法は、組織運営の問題と同じように、地域社会との連携の中に解決方法を見出すことができる。まず教育の現場として、青少年だけでなく成人に対しても生涯学習の機会を提供し、団員の抱く文化的な側面に対する要望に応えることができる。このことは、教育、文化的な面で、地域社会とのつながりを強めることにもなる。また、財団法人や行政の支援を受け、地域文化の活性化に役立つ活動をすることで、経済的な悩みの軽減、活動を続けていくことに対する喜びを持つことができる。アマチュア・オーケストラは、地域文化の活性化に貢献するために、企業によるメセナ活動と連携して、より社会との結びつきを強めることが大切である。さらに、オーケストラの活動を芸術文化活動を非営利に行うアート NPO として捉え、地域文化の活性化に協力することもできる。

このように、アマチュア・オーケストラは、教育、芸術、文化を通じて、地域社会の振興の担い手となることができる。

### 第 三 章

アマチュア・オーケストラは、その活動の中に地域文化の振興に貢献することができる可能性を秘めていた。生涯学習の学びの場としての機能、メセナ活動と連携した地域社会における活動、そして、NPOとしての活動の三つが、具体的な活動の足場となるものである。

ここからは、生涯学習、メセナ活動、NPO 活動のそれぞれについて、アマチュア・オーケストラとの関係をより詳しく検証していく。

#### 生涯学習とアマチュア・オーケストラ

人は、より文化的な環境のなかで生活したいという願いを誰もが持っている。この願いは、心豊かな社会を形成していくことで果たされていくと考えられる。そのために、人が芸術や文化とふれあい、創造性や表現力を育てていくことは、心豊かな社会をつくる基礎となる。生涯を通じて持続的な学びをすることは、生活の中に精神的な豊かさをもたらす。

1995年に採択されたユネスコ（UNESCO 国際連合教育科学文化機構）の「学習権宣言」が、生涯学習について考えるときの基本となっている。「学習権宣言」では、人々にとっての学習の権利についてこのように述べられている。

「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的、集団的力量を発達させる権利である。」

また加えて、学習権とは、

「万人に共通な基本的人権であり、学習活動は、人々を“なりゆきまかせの客体から、みずから歴史を創る主体に変えるもの”である。<sup>17)</sup>

としている。

ここに示されている理念は、芸術と、特に音楽と向き合うときの人間の内面的な活動が、基本的権利として与えられていることも示している。演奏家が音楽と向き合うときは、楽譜を読み解き、その意味するところを問い続け、考えることから始まっていく。そして、想像し、捉えた作品の姿を演奏というかたちで創造していく。創り出された音楽的空間は、演奏家の内面を通りながら音楽作品のいわば新しい歴史として作り上げられたものである。決して一人では成すことのできない音楽的空間は、人々の中にひとつの歴史として刻まれていく。また、アマチュア・オーケストラに参加し、音楽と向き合うことは、主体的な生き方を表現することでもある。主体的に学ぶことは、主体的な創造活動へと発展していく。アマチュア・オーケストラは、年齢や社会的立場を超えた音楽愛好家の集まりであり、個人的、集団的力量の発達についても、生涯を通じて主体的に学ぶことが実践されている。

アマチュア・オーケストラには、「学習権」の理念を実現するための十分な環境がある。そのことは、生涯学習の場としての機能が備わっていることの証である。

生涯学習とアマチュア・オーケストラとの関係について、もうひとつ触れておきたいことがある。それは、生涯学習の学習者のたどるプロセスと、オーケストラの練習におけるプロセスとの類似性である。生涯学習のプロセスは、

17 『ユネスコ学習権宣言』第4回ユネスコ国際成人教育会議、1985年3月29日

活動→振り返り→理論とつぎ合わせ→実践に移す

の順で進められていく。では、オーケストラの練習におけるプロセスを生涯学習のプロセスに沿ってたどってみる。

演奏（実践）→楽譜の読み方が正しかったか、技術的な問題点はどこにあるか（振り返り）→音楽的な面についての理論的な補い、技術面の改善（理論とつぎ合わせ）→以上のことを踏まえた再度の演奏（実践に移す）

この練習におけるプロセスは、日常の練習で繰り返されている。地道な作業であるが、このプロセスの繰り返しで演奏を磨いていくことになる。そして、実践の最後の段階である演奏会は、アマチュア・オーケストラにとって、日常の地道な練習を乗り越えた芸術活動の総決算のときである。この演奏会は、生涯学習の視点から見れば、「学習成果の発表の場」として捉えることができる。

以上のように、生涯学習における学習のプロセスとオーケストラの練習のプロセスは、同じ流れを持っている。このことから、アマチュア・オーケストラが生涯学習の場としてふさわしいことがわかる。

### メセナ活動とアマチュア・オーケストラ

アマチュア・オーケストラは、地域文化の振興のための役目を期待されるようになると、さまざまな地域振興策や芸術文化支援策と関係を持つようになってくる。第一章で紹介した「宮前フィルハーモニー交響楽団」を例にすると、定期演奏会では地元の信用組合からの協賛を受け、また教育委員会の後援を受けていた。教育プログラムである「おもちゃ箱Ⅱ」は、「神奈川県芸術文化活動団体事業補助金採択事業」として開催されていた。アマチュア・オーケストラに対するこのような支援策は、オーケストラが地域活動に取り組む際の大きな助けとなる。一方で芸術文化支援を行いたい企業、財団法人、行政などにとっては、アマチュア・オーケストラの活動が支援の目的にかなうものとして受け止められている。

では、メセナ活動とアマチュア・オーケストラの関係について、フランスのナント市のメセナ活動を紹介しながら検証していく。

メセナ（mécénat）とは、芸術文化支援を意味するフランス語である。古代ローマ皇帝アウグストゥスに仕えていたマエケナス（Maecenas）が、詩人や芸術家を手厚く擁護、支援したことから、後にその名をとり、「芸術文化を擁護、支援すること」をメセナというようになった。

「2004年度メセナ活動実態調査」に、メセナ活動の目的についての統計がある。<sup>18</sup>それによると、

社会貢献活動の一環として 88.3%、

地域社会の芸術文化振興のため 62.3%

芸術文化全般の振興のため 56.7%

長期的に見て自社イメージの向上につながるため 54.6%

となっている。この調査からもわかるように、メセナ活動の目的の大きな柱として、社会に対する貢献、そして地域社会の芸術文化の振興が重要になってきている。

このような流れにあるメセナ活動の特に成功した例として世界的に評価の高いものが、フランス北西部にあるナント市の成果である。ナント市は、以前造船業を中心として栄えた町であった。ところが、造船業の後退にともない町は活気を失い、不況と人口の減少に悩むことになる。しかし、1995年から始められた「ラ・フォル・ジュネ（熱狂の日々）」と題された音楽祭が、ナント市を蘇らせることになる。今では、「フランスでもっとも住みよい街」と言われるまでに再生を果たしている。ナント市の成果は、地域社会

18 (財)企業メセナ協議会編著『いま、地域メセナがおもしろい 企業+アート+まちの実践』ダイヤモンド社、2005年、付録56項

や経済の活性化に文化の力が必要なことを見事に証明したとして、メセナ活動の注目すべきモデルケースとなっている。ナント市の副市長で、文化担当のヤニック・ガン（YANIK・GUIN）氏は、「文化はあらゆるところに存在し、あらゆる人が参画できるものでなければならない。…貧困層の人、あるいは滅多に芸術には縁のない人々にも門戸を開放する。」<sup>19</sup>と語っている。

ナント市の例は、芸術・文化が社会を活性化させる力を持っていることの証である。このことを踏まえてアマチュア・オーケストラの活動に目を戻すと、そこには芸術・文化の創造力を備え、地域に根ざしながら多くの人に芸術の門戸を開放しているオーケストラの姿がある。第一章で紹介した「立川管弦楽団」の子どもを持つ団員のために託児室を用意することや、初心者を受け入れながらの活動は、芸術の創造活動に対する機会をさまざまな人に広げている。また「宮前フィルハーモニー交響楽団」の子ども向け演奏会における試みや、高齢者の演奏会への無料招待などは、芸術を鑑賞する機会の広がりにも役立っている。このように、芸術の創造、鑑賞の両方の面に対して、アマチュア・オーケストラは、多くの人に芸術の門戸を開いている。これに比べて、プロフェッショナルのオーケストラの活動は、鑑賞面に対するものに限られがちである。芸術の創造と鑑賞に対して発揮されるアマチュア・オーケストラの役割は、地域文化の振興を目指すメセナ活動にとって、またとないパートナーである。

## NPO 活動とアマチュア・オーケストラ

次に、アマチュア・オーケストラのNPO(非営利活動)としての側面について検証していく。まず、NPOとはどのようなものなのか整理し、アマチュア・オーケストラの活動とNPOの活動との接点を明らかにしていく。

最初に、ある組織がNPOであるための要件を整理する。アメリカのジョンズ・ホプキンス大学の「非営利セクター国際比較プロジェクト（JHCNP）」により示されたNPOの要件は次の五つである。

- ① 利潤を分配しない。(利潤を次の活動のためにストックするのはかまわない)
- ② 非政府
- ③ フォーマル（組織として体裁を整えている）
- ④ 自己統治（独立している）
- ⑤ 自発性

以上の要件をアマチュア・オーケストラの運営、組織形態と照らし合わせてみる。

「①利潤を分配しない」と「②非政府」の二つは、アマチュアの活動であるから当然当てはまる。「③フォーマル」は、オーケストラに個人が集まった集団であるから組織としての体裁がなければ活動はできない。

「④自己統治」と「⑤自発性」についても、アマチュアの組織であれば何者にもよらず、自発的な活動がなされなければならない。このように見てくると、アマチュア・オーケストラは、NPOであるための要件を十分満たしていることになる。

それでは、アマチュア・オーケストラがNPOとする場合、どのような活動がふさわしいと考えられるであろうか。まず、NPOの活動としてどのようなものがあるのか示していく。第二章で取り上げたNPO法（特定非営利活動促進法）の第一章、第二条（定款）には、特定非営利活動に該当する「活動事業」として次の12項目が挙げられている。<sup>20</sup>「活動事業」とは、NPO法人認可申請のときに示さなければならない

19 文化フォーラム『文化の地方分権がフランスを変える…ナントの実践』メセナシリーズ No.8、社団法人企業メセナ協議会、2005年、12項

20 特定非営利活動促進法、第1章、第2条 別表、1998年3月25日公布、法律第7号



いその団体の活動分野のことをいう。

1. 保健、医療、または福祉の増進を図る活動
2. 社会教育の推進を図る活動
3. まちづくりの推進を図る活動
4. 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
5. 環境の保全を図る活動
6. 災害救援活動
7. 地域安全活動
8. 人権の擁護または、平和の推進を図る活動
9. 国際協力の活動
10. 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
11. 子どもの健全育成を図る活動
12. 前各号に掲げる活動を行う団体の運営または、活動に関する連絡、助言または援助の活動

この12項目の中で、アマチュア・オーケストラの活動としてどの項目がふさわしいであろうか。ここまでに検証してきた「生涯学習」や「メセナ活動」、またそれらの活動を通じて目指されている地域文化の振興、芸術文化の振興などを考慮しながら選んでみる。すると次の4項目が考えられる。

2. 社会教育の推進を図る活動
3. まちづくりの推進を図る活動
4. 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
11. 子どもの健全育成を図る活動

それでは実際の活動事業ではどのようなになっているか、具体的な例を挙げて検証する。

取り上げるのは、「NPO 法人福島ジュニア・オーケストラ連絡協議会」の「活動事業」である。<sup>21</sup>これは、ジュニア・オーケストラの例ではあるが、アマチュア・オーケストラがNPOとして取り組む代表的な活動が含まれている。

- ・子どもたちの音楽活動支援事業
- ・子どもの健全育成を図る
- ・芸術活動を通じた社会教育やまちづくりの推進
- ・地域文化の振興のための活動

この「福島ジュニア・オーケストラ協議会」の示している活動事業は、NPO法の挙げているNPOの活動事業と対応している。まず、「子どもたちの音楽活動支援事業」と「子どもの健全育成」は、NPO法の示している「4. 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動」と「11. 子どもの健全育成を図る活動」に対応し、「芸術活動を通じた社会教育やまちづくりの推進」と「地域文化の振興のための活動」は、「2. 社会教育の推進を図る活動」と「3. まちづくりの推進を図る活動」のそれぞれに対応している。

このことは、アマチュア・オーケストラ活動が、NPOの活動としてふさわしいことを明らかにしている。成人を中心としている市民オーケストラの活動も、ジュニア・オーケストラと同様に、NPOの活動事業としてふさわしいものがある。「2. 社会教育の推進を図る活動」や「11. 子どもの健全育成を図る活動」は先に検証した「生涯教育」の場としての役割と対応している。また、「3. まちづくりの推進を図る活動」や「4. 文化、芸術、またはスポーツの振興を図る活動」は、メセナ活動と連携しながら進め

21 [http://www.prf.fukushima.jp/npo/npo\\_houjin\\_ichiran.htm](http://www.prf.fukushima.jp/npo/npo_houjin_ichiran.htm) (2006/02/24にアクセス)

られる地域文化や芸術の振興、創造活動に当てはまるものである。アマチュア・オーケストラの活動から生まれてくる地域活性化へのさまざまな取り組みは、NPOの活動として捉えていくことが十分できる。

ところで、アマチュア・オーケストラが、NPO法人として活動することには、いくつかのメリットが考えられる。

- ・ボランティア活動がしやすい。
- ・社会的認知、信用度が高まる
- ・法人化することでより契約の主体者とし金融機関との交渉がスムーズになる。
- ・補助金を受けやすくなる
- ・公的施設を使用しやすくなる

これらのメリットの中で特に、社会的認知や信用度が高まることは、企業や公的機関との連携を必要とするNPO活動にとっては、大きなメリットである。

しかし、NPO法人格を取得することにより、社会的存在としての責任も重くなってくる。また、事務手続きの面でも、年度ごとの会計報告、事業報告の提出など、しなければならない仕事も増えてくる。NPO法人として活動するには、しっかりとした準備と心構えが必要になってくる。

そのために、NPOでは、活動の理念や目的、重点的に活動を展開する分野について明文化したものに、「ミッション・ステートメント」というものがある。これは、NPOとしての活動の出発点を確認するために重要なものである。また、メセナ活動などの社会的活動と共同作業を行うとき、しっかりと主張し独立性を保つためにも重要なものである。活動における自主性や独立性を保つことは、NPOであるための要件でもあった。地域文化の振興と社会の活性化を目指し、共感を得た活動をするためにも、自主性と独立性を保つことは大切である。

## ま と め

アマチュア・オーケストラは、地域文化の活性化、芸術文化の振興のため、社会的な役割を果たす機能が十分備わっていることが明らかになった。「生涯学習」「メセナ活動」「NPO活動」の三つのキーワードからアマチュア・オーケストラの社会資本としての可能性を探ってきた。そのことを通じて、アマチュア音楽家の集まりであるオーケストラが大切な社会的存在であることが示され、また、オーケストラの発信する芸術、文化には、社会を変えていくエネルギーがあることが証しされた。

## 結 論

「アマチュアは音楽の王道である。」という芥川也寸志の言葉は、音楽に対する深い愛情と、慈しみの気持ちが音楽表現に宿ることが、アマチュアのみならず、すべての音楽の本来あるべき姿であることを意味している。音楽に限らず芸術文化とふれあい、精神的深さを感じることは、心の豊かさをもたらしてくれる。人の心のもちように余裕が生まれれば、社会も豊かになってくる。人は、芸術を仲立ちとして集い、交流し、違いを認識し、お互いを大切にしながら生きていく喜びを得ることができる。

「文化の地方分権」が示す地域文化に寄せる期待が大きいのは、芸術文化に社会を活性化させ、心豊かな生活を形成する力があることを人々が認識しているからである。その力を地域社会の中で生かすために、アマチュア・オーケストラは何ができるのかを探ることが本論の目的であった。アマチュア・オーケストラが抱える運営面での問題は、地域社会とコミュニケーションをとりながら、オーケストラの社会的役割を考えると解決方法を見出すことができる。

そこでキーワードとして選んだ「生涯学習」「メセナ活動」「NPO 活動」の三つの分野は、それぞれお互いが交わりながら展開していた。例えば、地域文化の振興を重要な目的として捉えている企業などのメセナ活動が、アマチュア・オーケストラの持つ芸術文化の発信力や創造力をパートナーとして活動を展開する。その活動は、文化、芸術の振興やまちづくりの推進を図る NPO の活動とも重なり合う。この活動の中心にあるアマチュア・オーケストラは、地域住民と芸術との接点として創造活動や継続的な学びへと人々を導いていく。このアマチュア・オーケストラを中心とした地域文化のありようは、オーケストラの活動を活発にするだけでなく、地域社会をも生き生きとさせることができる。

社会との接点を大切にしたアマチュア・オーケストラの活動が広がりを見せることは、地域文化の活性化へとつながっている。芸術の創造への参加、あるいは芸術文化支援活動への参加は、心豊かな社会を形成する基となる。加えて、アマチュア・オーケストラは、音楽を通じた青少年育成に携わることで、芸術文化の未来を創造するというとても大切な役割も担っている。このことは、アマチュア・オーケストラが社会に存在する意義をより明らかにすることになる。

## 参考文献

1. 渡邊洋子『生涯学習時代の成人教育学 学習者支援へのアドボカシー』明石書店、2002年
2. 山内直人『NPO 入門』日本経済新聞社、〈日経文庫〉、2003年
3. 山岸秀雄編『アメリカの NPO 日本社会へのメッセージ』第一書林、2000年
4. (社)企業メセナ協議会編著『いま、地域メセナがおもしろい 企業+アート+まちの実践』ダイヤモンド社、2005年
5. 『企業メセナ協議会研究部会2003年度研究報告』「企業メセナの新たな展開 アート NPO との連携」社団法人企業メセナ協議会研究部会、2004年
6. 『民間財団、公的財団の文化芸術振興に関する基礎調査』[報告書] 社団法人企業メセナ協議会研究部会、2004年
7. 文化フォーラム『文化の地方分権がフランスを変える ナントの実践』メセナシリーズ No. 8、遮断法人企業メセナ協議会、2005年
8. 『サラサーテ vol.9 〈秋〉』せきれい社、2005年、10月
9. 新交響楽団 『第113回演奏会パンフレット』 1986年、11月